温故知新メディア散歩

週刊誌の鬼・扇谷正造

― 朝日退社時の言葉「現代史の目撃者たれ」―

百年の伝統を持つ『週刊朝日』休刊。『サンデー毎日』とともに日本の週刊誌の走りだけに時代を感ずる。出版学会先達に「週刊誌は新聞紙の紙が余ったから作った」と聞いたが本当か？週刊誌は戦前は新聞社独占で、戦後しばらくして昭和三十年代に続々と出版社系週刊誌が登場した。『週刊朝日』『女性自身』は百万部を超えていた。特に扇谷正造編集長率いる昭和三十年代の『週刊朝日』は百数十万という部数を誇っていた。（菊地実）

※今回は、著書ではなく、人物にフォーカスしてお届けします。

飛ぶように売れた

半世紀前、東京中野で本屋アルバイトをしていると分厚い『月刊文藝春秋』をはじめ『週刊新潮』『週刊朝日』が飛ぶように売れた。それ以前人気のあった『中央公論』『世界』は下火で、近所の商店旦那衆・中高年サラリーマンは春秋・新潮、インテリっぽい人は『週刊朝日』*1、学生は『朝日ジャーナル』、おばさまたちは『女性自身』に代表される女性誌。この中身は皇室と芸能人ネタだった。日本ではクラス・マーケティングは成立しないと言われるが、雑誌だけは当時から完全にクラス化されていた。

私の周りには週刊誌で活躍する知人が何人もいて、取材システムについて早くから知見があった。本欄でも週刊誌で活躍した梶山俊之・草柳大蔵といういわゆる元祖「トップ屋」や調査ジャーナリズムを確立した立花隆を紹介してきた。高邁なインテリ論文が載る月刊誌とニュース報道中心の新聞の間で「週刊」というタイムリーな企画はどこに位置付けられるのか、様々な試行錯誤があった。

戦後マスコミ三羽ガラス

評論家大宅壮一は「文春の池島信平、暮らしの手帳の花森安治、朝日の扇谷正造」の三人を＜戦後マスコミの三羽ガラス＞と評し、扇谷を「週刊誌の鬼」と呼んだ。

大宅と三羽ガラスは、丁度一世代違い。戦前からバリバリ活躍していた大宅と異なり、三人が知られるのは戦後。面白いのは大宅も含め全員東京帝大出身だが、育った環境はものの見事に異なる**＜図表1＞**。

池島信平は＜編集の鬼＞と異名をとったほど見出し付けがうまかった。伝記を読むと体が弱く西洋史を学び、学者志望だったらしい。本郷生まれの東京人で文春公募一期生。花森安治は化粧品老舗伊藤胡蝶園（のちのパピリオ）に入社。デザイナーとして活躍した。

＜図表1＞大宅・池島・花森・扇谷の概要

名前	生年	出身地	大学	経歴等
大宅壮一	1900（明治33）	大阪・高槻市	東京大学 社会学科	評論家
池島信平	1909（明治42）	東京・文京区	東京大学 西洋史学科	文藝春秋社
花森安治	1911（明治44）	兵庫・神戸市	東京大学 美学美術史科	『暮らしの手帖』創刊
扇谷正造	1913（大正2）	宮城・遠田郡	東京大学 国史学科	『週刊朝日』編集長

（メディア開発綜研©）

伊東胡蝶園は無鉛白粉開発で成功した明治の四大化粧品会社で広告史には必ず出てくる。花森安治はスカート・おかっぱ頭・奇天烈ファッションと実に逸話が多い。神戸は稲垣足穂・淀川長治と面白い人を排出する。しかし私が注目するのは戦中「大日本翼賛会」外郭団体での国策コピーづくりである。「進め一億、火の玉だ」とか傑作が多く、コピー能力のない私からすると実に羨ましい。

仙北人

ところで花森と扇谷は「帝国大学」新聞編集部で一緒だったらしく、戦後、扇谷は暮しの手帖社から本を出している（池島も）。

さて今日の本題／第三の男、扇谷正造は宮城県遠田郡桶谷町生まれ。ここは仙北（旧大崎地方）で江戸時代は亘理伊達氏城下町で米どころである。昭和十年朝日新聞入社して東北の支局勤務後、長らく従軍記者をつとめ、終戦間近には兵隊として中国戦線に送られている。戦後の昭和二十二（1947）年『週刊朝日』編集長。翌年六月太宰治心中事件時に山崎富栄遺書を入手掲載して『週刊朝日』は完売し、部数増というのはは出版史によく出てくる。文春砲や週刊新潮、あるいは写真週刊誌ではないが、「新聞は戦争で部数増となり、週刊誌は事件スキャンダルで名を挙げる」。

企画は人間通のなせる技

昭和三十年代百万部を超えて他を寄せ付けなかった『週刊朝日』。売物は報道以外にも対談、連載小説といった類だった。特に徳川夢声をホストにした昭和二十六年～三十三年「問答有用」は各界著名人約四百人を相手に対談の妙味を垣間見せていた。夢声老の類い稀な話芸と朝日新聞社看板を生かした好企画だった。扇谷の編集長在任は昭和二十二年～三十三年で、「問答有用」終了とともに出版局次長に栄転する。『週刊朝日』はその後も「街道を行く」（司馬遼太郎／1971-1996年）をはじめ、「ブラックアングル」（山藤章二／1976-2021年）と評判を取ったロングセラー企画も多い。私自身たまたま歯医者で読んだ「街道を行く」の続きが読みたくて一ヶ月ほど『週刊朝日』を購入したこともある。

『週刊朝日』は休刊前から「ジャーナリズムでなくなった」（青沼陽一郎）という批判もある。元々新聞社では編集局が栄達の道で、出版局はマイナーだった。大手出版社に匹敵す出版部門*2だったのに、いつのまにか子会社となり、縮小サイクルに入ってしまった。

扇谷は学芸部長・論説委員を経て昭和四十三年朝日新聞を退社、その後も編集やテレビ番組ホストと売れっ子評論家として活躍した。八十年代はじめ一度だけ出版記念パーティーでお見かけした。テレビで見るように分厚いメガネをかけて穏やかに談笑していた。評論家時代の扇谷の著作は自己啓発本が多く、私の食指をそそらない。たまたま扇谷がエッセスト・クラブ賞受賞者を対象に責任編集した『一冊の本』（PHP出版／昭和五十一年）がある。すこぶる面白い本で、その中で扇谷自身も書いているのがかの自己啓発本バイブル『D・カーネギー／人を動かす』である。朝日退社時に後輩たちに**「現代史の目撃者たれ」**と言ったと伝わるが、人間通カーネギーとどう結びつくのか？どうしても疑問が浮かんでくる。とある新聞人OBからは「戦争体験が彼を変えた」と漏れ承った*3。扇谷は私の父と同郷・同世代で、没後

*1：週刊朝日は新聞販売店からも届けられ、本屋販売の倍以上の部数が出ていた。

*2：朝日新聞社出版局は、『中国古典選』『宮崎市定 アジア史論考』など定評ある本も多く出版していた。

*3：池島は文藝春秋編集長から海軍に行った。三人とも典型的な戦中派である。
（塩沢実信『雑誌記者 池島信平』1984年文春文庫）